

続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.47)

「Túを使って友達と通になる」

・・・君・僕で話そう・・・

いきなり、愚にもつかない質問をして申し訳ないが、「エツオ」などと苗字なしで、名前と呼ばれたら皆さんは、どのような感情を持ちますか。ボラッチョ氏のように、法定老齢年齢に達して、過去に囚われがちな人生を送っている者としては、「なに！」といささか不満な方に回答してしまう。

なぜなら、経験上から言えば、まず両親や親戚などからしか、このようには呼ばれなかったからで、他人からは苗字を呼び捨てにされることはあっても、名前の呼び捨てはあまり記憶がない。最近のように、テレビなどで年端の行かないタレント達がドラマの中で、敬称なしで名前を呼び合っているのを聞くと、ドラマの内容よりも、今もって気色悪い気持ちの方が先に立ってしまう。

ところが当地へ来て見ると、これは当たり前前で、名前どころか、もっと省略型で呼び合っている。私の仕事上の元の責任者の名前は、ベロニカ ガルシア・・・という女性であるが、ガルシアなどという苗字の呼びかけは一度も聞いたことがない。しかも部下からは、「ベロニカ」と呼びかけるどころか、「ベロ」である。ベロなどといわれると、私の住んでいた地方では、「舌」の意味だよと突っ込みも入れたくなる。

配属先の最高トップの女性の名前は、マリア イサベル・・・であるが、日本のように、「部長××××」、ひどいのになると、ご丁寧にも

「部長、○○○○さん」などと呼ぶことがあるのに反して、ここでは末端の部下なども、皆「マリベル」と敬称、肩書きなし、しかも省略形で呼ぶ始末で、もはやボラッチョ氏が抱いている、呼び捨てなどと言うイメージはまったくない。



これらに類する呼び方は、他の名前の方にも当然のように当てはまり、肩書き社会が厳然と存在している国にしては不思議な気がする。上司と言う意識は当然あるのだが、仕事以外の個人的なことは、上司でも部下でも対等だと言うことだろうし、仲間内では身内意識が相当強く、姓名でなく名前呼び合うことによって、お互い個々の人間関係がより強固になるのである。

名前だけの呼び方も、本名が推定できるものから、意味を知らないと本名が分からない者まで様々で(次ページ、「ちょっと休憩欄参照」)、お互い名前呼び合った後、聞いていて背中がムズムズ痒くなり歯が浮いてきそうな、美辞麗句を取り入れた挨拶が続く。

この名前呼び合うことと、表裏一体の関係にあるのが、複雑なスペイン語の文法である。

「**Vamos a hablarnos de tú**」(バモス ア アブラールノス デ ツウ と発音し、意味はサブタイトルの通りである)という、スペイン語会話の基本的パターンがある。タイトルやこの文にある、**Tú**(ツウと発音)は2人称の主語(君、お前、あんたなどの意味)である。

物の本によると、友達や身内の親しい人の間で使うとなっており、一般的には、面と向かっている相手でも、3人称の、**Usted**(ウステーと発音)(あなた、貴下)など相手を指す丁寧語を使い、3人称の活用を使う。

要は直接相手と話していても、丁寧に話すときは、3人称の活用を使い、親しくなってきたり対等の仲間だと認識されると、2人称活用を使う。だから、親しく2人称で話している者同士が、陰悪な空気になるとたんに、3人称活用が変わるといふ芸当も可能で、相手に怒りの度合いを察知させることが出来るのである。

ちょっと休憩

職場で聞いた省略名の一例（左が正規の名前、右が省略名、愛称など）

Alberto ---- Beto
Antonio ---- Toño
Dolores ---- Lola
Eduardo ---- Lalo
Ernesto ---- Neto
Francisco --- Pancho
(または Paco)
Jesús ---- Chucho
José ---- Pepé
Patricia --- Paty
Rosario ---- Charo
Silvia ---- Chivis
Victoria --- Vicky

しかし、ボラッチョ氏にとっては、自分の娘たちより年下の女性から、人なつこい顔で、「エツオ」などと呼ばれると、顔はにこやかに笑って対応するも、心の中では何ともいえない名状しがたい感情に陥る。

「これは当地の一つの慣習だ、現実を受け入れよう」との考えを有しつつも、他人を尊重するという永い間持ち続けた感性との間で、今もってこの2人称の活用を使うのに、心理的抵抗感を覚え、相変わらず丁寧語のほうを使うことが多い。

しかし、どんなに親密になっても、私の名前をもっと省略して、「エツ」などと呼ぶ人はさすがにいない。当方としても、「エツ」などと省略されたり、当地流の愛称風に「エッチー」などと呼ばれても、「親密度の割合が高まったな」などと、「ニヤリと悦」に入るわけにはいかないが。(^^)

「古い奴だと思いでしょが、古い奴こそ新しいものを欲しがらるもんでございます。……」、1971年頃にヒットとした、俳優の鶴田浩二さんがマイクにハ

ンカチを沿え、耳に手を当てて歌う、「傷だらけの人生」(作詞:藤田まさと/作曲:吉田正)の、冒頭の科白の部分を出してしまった。

考えてみれば、日本でも、「俺とお前の仲ではないか」などと、「二人称的立場」を強調したり、英語の会話集の中でも、「ファーストネームで呼んでいいかい(あるいは呼んでくれ)」などの例題もあることだから、もっと割り切って考える方が良いのかもしれないが、国際人になるのはなかなか難しい。

「生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」(シェイクスピアの戯曲「ハムレット」中の有名なセリフ、ただし、これと異なった訳はいくつか存在する)に倣って、「tú 言葉を使うか、使はないか、それが問題だ」と頭を抱えつつ、またまたテキーラの杯を重ねるのであった。

酒飲みが飲む理由は色々こじつけられるものだ。

(2010年8月28日、先週は3日間、述べ15時間の講義を、大学で行いました)



こんな所にもTúが。
君と君のもう一人の君・・・
某自動車の広告の一部
(tuのアクセントの有無で、意味がことなる)